



## 人を驚かすための 序言

竹内芳郎

◆本書『討論 野望と実践』は、1989年春に私の開設した「討論塾」なるものの討論実践を記録した「塾報」約300通のうち、1999年9月15日に発行した報141号から2012年5月23日に発行した報290号に至る150通の塾報を幾つかの主題毎に整理・削減し編集し直して成ったものである。報141号以前の塾報は、1999年7月に三元社より刊行した単行本『天皇教的風土との対決：「討論塾」その理念と実践』の中に既に収録されて居るので、したがって本書は、言わばその三元社本の続編だということになるわけだ。その三元社本がわざわざ「天皇教的風土との対決」と銘打って刊行されたのは、この日本の精神風土のなかで真に＜討論＞を成立させ実現してゆくためには、否応なく私の言う＜天皇教＞文化（その頂点には、天皇御自ら文化勲章を授与するお目出度い儀式がある）との深刻な対決とその克服とが絶対に不可欠だからであり、この信念は、本書冒頭の記述をご覧下さるだけで直ちに明瞭となるように、本書でも余す所なく貫徹して居る。そして、本書がわざわざ「野望と実践」と銘打たれて居るのは、現在の日本の文化状況では、＜討論＞の志向は未だに真の実現から程遠い＜野望＞の域に停まって居るからであり、そのことは、討論を口先だけでなく現実に＜実践＞して見れば、誰でも否応なく痛感せずに居られない所だからだ。既に出版されて居る『討論民主主義』なぞという浅薄な本とは、そもそも質が違うのである。

実際、口先だけでなく現実に実践して見れば、この国の精神風土では、討論という作業がどんなに困難を極めた作業であるかが、立ち所に解ってしまう筈だ（本書第I部Aがわざわざ「暗夜行路」と銘打たれて居るのに注目）。前著の三元社本が最初の「理念とその実践」の項目の後に直ちに「挫折とその教訓」という項目を設置したのもこの故であって、実際、本塾の討論に参加した人は総数200名以上に上ったと思われるのに、最後まで本塾に踏み留って実際に討論を続行して居る塾員は（名目だけで実際に討論に顔を見せない塾員は別にして）ほんの数人しか残って居ない。その内、特に年若い時期から討論塾に参加して居た福地俊夫氏や鈴木一郎氏などは、私も思わず目を見張る程の知的成長ぶりだ、決して私なぞが先輩顔して教えたわけではない、自ら真剣に討論を實踐して、その討論実

001

1

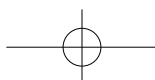
10

20

30

32

3





## 第I部

の方に重点を置こうと考えて居る。

\* \* \* \*

## 002

◆以下、言い残したことを、主として事務上の事だが、若干付け足して置きたい——①この1300pagesにも及ぶ浩瀚な本書は、討論に取り上げられた主題の性格に着目して三つに大別されて居る。その**第I部**は、討論実践の具体的な経過記録と、その討論実践を裏から支えて居る思想的背景の記述であり、**第II部**は、本書の思想的基盤たる＜討論民主主義＞なるものの本質記述と、また同時に、＜討論民主主義＞に関連する様々な討論主題の集積であり、そしてその最後は、今日の最新課題たる「公共哲学」なるものに関する討論記録で終わって居る。但し、この最終部分はまだようやく、これをめぐる討論が始められたばかりで、全く未完の状態であることをお断りして置く。**第III部**は、以上の討論民主主義が行われて居る社会状況のなかで特に目に立つ諸問題を選んで論じて居るが、その中で際立って長大な部分を占めて居るのは、最近新たに再登場して来たマルクス主義と『資本論』に対する、執拗を極めた再検討の営為である。

②討論に参加して居る人たちの氏名は、現在この討論塾を支えて居る中核的人物である福地俊夫（事務局担当）、池上聡一、鈴木一郎、皆川効之、それに私の5名だけは本名のまま記載し、他は三元社本010～1頁に記した理由から凡て変名にした。しかし、本書 **I 045** に記したK氏の勧告に従って、三元社本で用いたXA式の抽象的な記号は取り止め、日本人名に相応しい具体的なものを採用した。

③「討論塾開設Manifesto」および「塾則」は、三元社本に既に記載されて居るので、本書では記載を割愛した。そのような形式的なものを知らなくとも、この討論塾がどのように運営されて居るかは、本書**第I部**をご覧下されば立ち所に解って頂ける筈である。

④数多い過去の塾報を本書にまで編集し直し集大成するに際しては、誤字・脱字の修正に留まらず、不適切・拙劣な表現の改変・削除もかなり大胆に行った。しかし、発言趣旨を変更・歪曲するような事は決してしなかったことを、自信をもって断言することが出来る。この点、特に指摘して置きたい。なお「補註」は、発言趣旨をより明瞭にするために、発言時期よりかなり後のごく最近になってから、加筆した部分である。 [2012・9・6]

人を驚かすための 序言

竹内芳郎

## 第 I 部

### A 討論実践の暗夜行路

- a <討論>の神髄
- b 三元社本をめぐる合評会
- c 合評会後に呈示された諸問題をめぐって
- d 誠実な討論態度の確立をめざして
- e <討論>成立のための必須条件とは何か？
- f debate と discussion との相違をめぐって、その他

### B 鳴動する討論思想背景

- a post-modern と対決する<戦争体験>の岩盤
- b <売国奴>的愛国心との闘い
- c <幽鬼>としての靖国の「英霊」たち

## 第 II 部

### A <天皇教>と対決する<討論民主主義>

- a 「なぜ殺人はいけないのか？」
- b なぜ<人権>は普遍的原理なのか？
- c <欺瞞の体系>としての戦後民主主義

## B 犯罪と裁判、二つの闇

- a 9.11 terro. を直視して
- b オウムの犯罪とどう対決するか？
- c 日本の裁判制度  
——「裁判員制度」是非、人非人の溜り場としての日本の裁判所
- d <死刑>是非の前での私たちの心の揺らぎ

## C 民主主義を取り巻く難問

- a 「身障者」問題  
——身障を<欠損>と認めたがらない心理の秘密
- b feminism に寄せて  
——イラク人捕虜への米女性兵士の性的虐待をめぐる
- c <教育>問題  
——教育理想像の果しなき模索と教育現況の果しなき墮落

## D コトバ・哲学・宗教を経めぐる百鬼夜行

- a 現代日本人の言語意識の墮落としての  
<カタカナ外国語>を追放せよ
- b 人間にとってコトバとは？——人間だけが生きる宿命的生活圏
- c 「哲学」とは何か？——それをめぐる螺旋状に巡回する模索
- d common sense 論——そんなものは集団同調に行き着くだけ
- e 宗教と<自己欺瞞>——許容すべき自己欺瞞もある

## E カントから「公共哲学」へ

- a 平和論を主としたカント哲学をめぐる
- b カントからロールズ、サンデルへ (未完)

- c <公共>をめぐる勝海舟と福沢諭吉との対立  
——何れが正しかったのか？
- d 横井小楠の公共哲学

## 第Ⅲ部

### A 全共闘運動——その評価をめぐる激論

### B 現代を徘徊する妖怪——マルクス主義と『資本論』

- a 中国「文化大革命」とそれからの教訓
- b マルクス再評価のための前提条件
- c 鈴木問題提起と、その批判的検討
- d 池上投書1と、その後の討論
- e 池上投書2と、その後の討論
- f 池上投書3と、それをめぐる討論
- g 池上投書4と、その後の討論
- h 池上投書5と、それをめぐる討論
- i 池上投書6と、それをめぐる討論
- j 池上回答1と、それをめぐる討論
- k 池上回答2と、それをめぐる討論

### C 現代日本の言論・政治の腐敗状況

- a mass mediaの歪んだ報道姿勢、政治家の空疎な言動
- b 「やさしい右翼」をめぐる

- c 民主党政権への幻想と幻滅
- d 佐藤栄作首相のNobel平和賞受賞をめぐる欺瞞、その他

D <拉致>・北朝鮮問題の身勝手な対応を匡す

E 混迷する「中東」情勢への昏迷する対応

F 動物保護・環境保護をめぐる錯乱と迷走

G 「東日本大震災」は人災、Fukushima原発大事故は犯罪！

## 討論塾年譜

### 凡例

- \*本文中、段落末尾の [ ] で囲まれたゴシック体は、討論塾開催日、塾報番号、進行係、記録係を表す。  
例：[1999・9・25 報143 / 進=福、文=竹] は、1999年9月25日開催、塾報143号、進行係は福地、記録係は竹内である。
- \*本文は主題ごとに編纂され、各塾報をそれに合わせて分割・再統合して居る。したがって、同一の塾報が異なる主題箇所に分断して登場する。また、巻末に「討論塾年譜」を付し、討論塾開催日ごとの主題を時系列で通覧できるようにした。
- \*討論の流れの可読性を高めるため、区切れとなる箇所に◆を付した。
- \*I部、II部、III部毎に、◆の欄外に通番を振り、相互参照の便とした。  
例：本文中に「本書 **I 006**」とあれば、I部の◆欄外番号**006**の箇所を示す。
- \*本書に採録しなかった塾報箇所への参照は、原則として塾報の原文「報240 p.4 l.12」等のママとした。
- \*討論中に引用される書籍には、簡略な書誌情報をその都度記したが、原則として引用者が用いた版であり、最新版でないものもある。
- \*編著者自身の著作への引用は、その書誌情報を本文中に記さず、巻末の一覧に譲った。
- \*塾報にある註を（註）とし、これに本書編纂時の編著者による追加註を（補註）として追記日時を記した。また、討論に付随する追記は（付記）とした。